

いきもの記

Vol.181 2026.4.22

3年1組 千葉 美文
(科学研部生物化学班・鳥研究)

近所の鳥が絶滅危惧種になる時代 野鳥業界衝撃の2日間②

終章～どこかで聞いたことのある原因～

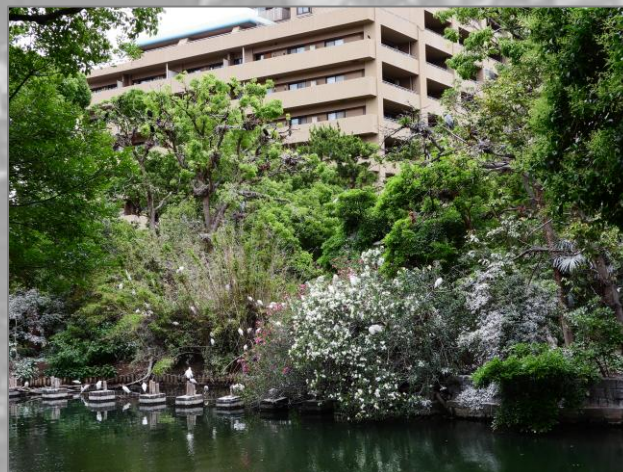
レッドデータブックを読み進めて、コサギやゴイサギの減少原因を見てみると、最後の方に「集団繁殖性サギ類に共通の要因として、住宅地近隣に立地したコロニーでの人との軋轢による追払いや営巣木の伐採に伴う繁殖成功の低下が懸念される」と記載されていた。なんだか身に覚えがあった。まさに横十間川親水公園のサギ山のことではないか。サギ山の臭いによって近所に迷惑がかかっているのは事実だ。しかし、それでサギたちの営巣地がなくなり、絶滅危惧種になってしまった。この危機を乗り越えるために、今後、我々鳥班は何とか共存の道はないか探っていこうと思う。

このレッドリストを見た後、私は数日たたぬうちにサギ山へ行った。去年、伐採された直後の繁殖シーズンではコサギがサギ山の外側の低木にも頑張って巣を作っていたが、**今年は巣が1つも見当たらなかった**。そして、その代わりにアオサギとゴイサギが増えていた。伐採された後も大量に営巣していたカワウは、そのまますの規模を維持していた。どうやら伐採により、低木のみがなくなり低木に営巣していたコサギだけが大打撃を受けたようだ。

ところで、苦情の原因となった「臭い」「騒音」は解消されたのだろうか。答えは残念ながら否であった。なぜかという、これは私の推測であり根拠はないが、臭いの原因であるフンの量が体格や餌の大きさから考えて、カワウの方がコサギよりも多くなると考えられるからだ。そして、騒音の原因もカワウである（鳴き声を発しているのはほぼカワウであり、サギたちは基本的に黙っている）。つまり、江東区の苦情対応策は、根本原因であるカワウに対して効果が発揮されず、何も解決できなかったどころか絶滅危惧種を減らす負の結果を生み出してしまったと考えられるのだ。（※あくまでも我々の見解であり、今後きちんと調べる必要がある。鳥班で調査を行うつもりだ。）

衝撃2日目

ちなみに、「衝撃の2日間」の1日目がレッドリスト発表の日だったのだが、2日目の3月18日には、日本国内でヤンバルクイナ以来45年ぶりとなる新種鳥類の発見があった。「トカラムシクイ」のことである。45年ぶりということもあって野鳥業界だけでなく、世間の大ニュースとなり、電車の車内ニュースにも載っていた。私もレッドデータブック改定に伴う研究ポスターの修正作業をしているときにこの報が耳に入り、2日連続の大ニュース攻撃で頭がパンクしそうになった。トカラムシクイはもともとイイジママシクイと同種とされていたのだが、このイイジママシクイが絶滅危惧種であったため、2種に分裂したことによりさらに個体数が減少することになるとともに、レッドリスト発表からわずか1日で、リストに記載された内容が大きく変わってしまうという、イイジママシクイのレッドリスト執筆担当者が気の毒な結果になってしまった。こうして、激動の2日間は終わった。



仙台堀川公園のサギ山。伐採される前（左）と、伐採された後（右）
ササ（タケかもしれない）と低木のほとんどが伐採されて、低位置で営巣していたコサギが激減してしまった。



電車内の広告 感激して思わず写真を撮ってしまった。